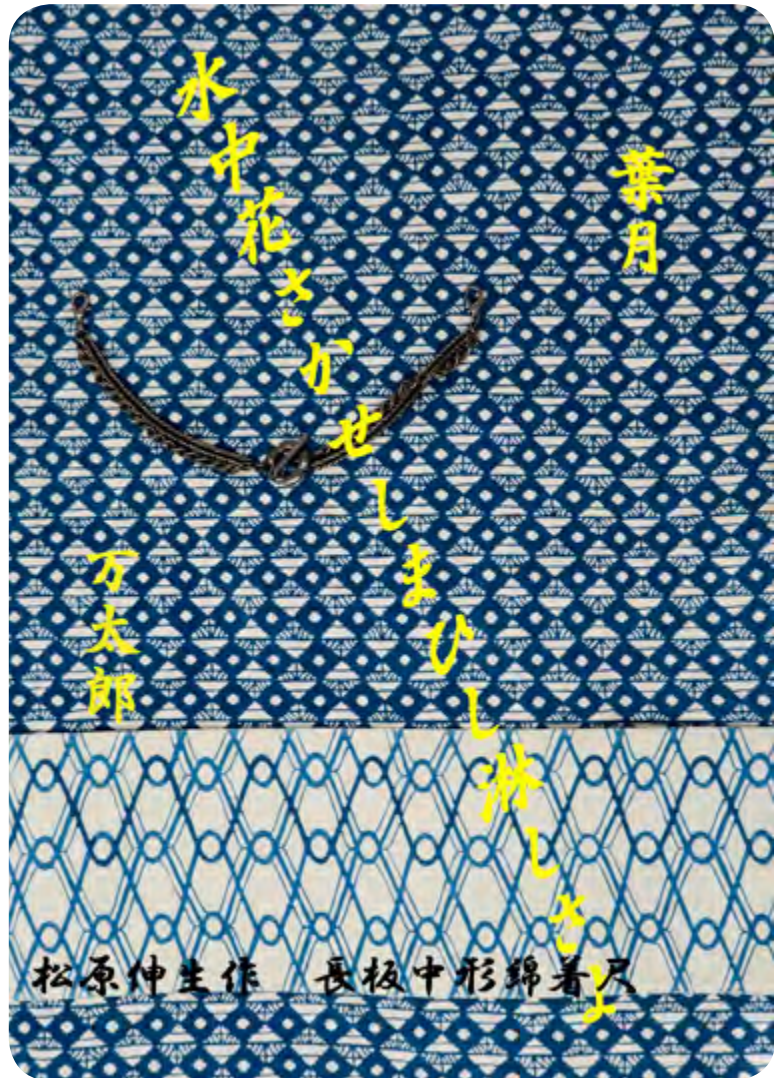


あそ

9

2018





水中花

葉月

万太郎

世し  
まひし  
滑し  
水し

松原伸生作 長板中形錦着尺

# あそ

九月



わらはやみ

東京

佐藤 喜孝

水底の水きらきらとわらはやみ  
叢のほたる袋は人なつこい  
夜になり赤くなりたる夏の月  
蟬はよく死ぬ蟲なりし蟬しぐれ  
猫の毛の黒がさはりて午睡かな

夏休み

石川

定梶じょう

喪服着て炎昼出かけねばならぬ  
千一夜物語蚊遣豚炆き  
何百里お国離れて羽抜鳥  
凌霄花一人生まれてふたり死ぬ  
シーソーも松の根っこも夏休み



埼玉

須賀 敏子

常夏月

詐欺らしきハガキ届けり冷し酒  
月明や金柑の花いや白く  
道炎ゆる句会は銀座一丁目  
郭公や戦場ヶ原分け入れば  
桃届く熟すを待てば香たつ

東京

田中 藤穂

油照り

祭髪浅草へゆく二階バス  
抱かれて紅濃くさして祭の兒  
油照り出雲風土記を卓上に  
つまづきし手足の痛み朝曇  
浦島草みんなで行きし城ヶ崎

三重

長崎 桂子

半ズボン

白靴等暁のホームにどよむかな  
荒梅雨の未曾有の被害祈るのみ  
梅雨明や悲惨な被害いつ癒る  
半ズボンボール片手に確と持つ  
雨上り電動三輪車半ズボン

東京

森 なほ子

虹の色

虹の色あり梅雨明の水溜り  
白南風や背に三角畳み皺  
緑蔭に動く野点の衣の色  
干し草の匂の茅の輪くぐりけり  
茅の輪までスマホに案内されてをり

東京

赤座 典子

七月

ただいまと七夕笹をひきずりて  
戻るまでここに居てねと花氷  
胴長な小玉西瓜の車切り  
「赤毛のアン」の世界へ逃げる熱帯夜  
七月や雨の怖さとありがたさ

埼玉

秋川 泉

夏に入る

サクランボ見入る人間老猫も  
広がりにて遠き日思ふ庭石菖  
陸奥湾に二重にかかる朝の虹  
野仏を描画伯松本全広さんをおぼやきし画家は夏至生れ  
酷暑日や静まり返る真昼道

東京

石森 理和

松ぼくり

summer  
松ぼくり・sale・帽子店から案内状  
五種類の松ぼくり有りかき氷  
夏豪雨家がぷかぷか流される  
同じ丈育つ青田に白鷺居る

埼玉

大日向幸江

秋茄子

里山に朝採りキュウリ梟も  
梅干を共同作業で干してをり  
秋めくや山小屋に見る薄明り  
夏風邪や猫を抱へて臥せてをり

東京 七郎衛門吉保

異変

温暖化二星の間に溜り水  
打ちまける茶色絵具や夏出水  
夏掠雨命と大地掠奪す  
黴も蚊も勢ひ鈍る四十度  
台風が左旋回する異変

東京 篠田 純子

夏点景

APAホテルのネオン目を刺す熱帯夜  
メイドカフェ暑しをところが猫の耳つけて  
雀と食ぶラーメン靖國みたま祭  
半蔵門より反時計回りに漕ぐ夜涼  
台風12号東京湾19水門閉鎖

## 七月号作品より

秋川泉・森なほ子

はや一年つかず消えない蛍光灯  
人間の夢を見ている鳥の子 佐藤 喜孝

蓬の香が魅力。作者は今も草餅を召し上がるたびに  
その時の丁寧に作られた御祖母様の手の温もりを想  
い出されるのでしょう。(泉)

葉山の老鶯逗子の吾妹子へ告白 篠田 純子

奥様の追悼句でしょうか。つかない蛍光灯は消え  
ようがありませんね。それとも一年の間消えずつい  
たままだったので、あらたにつくことはないという  
ことなのか……禅問答のような難しい句です。

葉山と逗子、老鶯と吾妹子これらの言葉の面白  
さ！このややマンガチックな傑作はどのようにして  
造られたのか、ほんとうに葉山だったのか、今度作  
者にお聞きしたいと思います。読む人によって評価  
は異なることとは思いますが。(なほ子)

二句目、鳥も夢を見るのか誰もわかりませんが、  
高い木の上から人間を見ている鳥の子に人間はどう  
見えているのでしょうか？まだ怖いものと思わず、  
不思議なものとしての人間の夢かもしれない。や  
さしい句です。(なほ子)

立夏です少女三角乗りをして 定梶じょう

芽だけ摘み濃き草餅や祖母の手の 七郎衛門吉保  
柔らかく鮮やかな新緑の色をした草餅(蓬餅)。

なんと気持ちのよい句でしょう。夏の始まりの浮  
き立つ思いがこの句から感じられ自転車の三角乗り  
をして走り去る少女。「立夏」という季語と呼応し  
て明るく清々しい感じが致します。(泉)

青嵐宅配便は小走りに

須賀 敏子

青葉を吹き渡る強風の中、宅配便の青年がその風  
に押されまた抗するように家々に荷物を届けてい  
る。強風の感覚と共にその姿がありありと目に浮か  
びました。(泉)

命日や夏蜜柑見ぬ世となりぬ、

田中 藤穂

長寿であられる作者には、ああ今日は○○の命日  
と思い出されることは多いと思います。その方と共  
に在った世ははるかになりました。ふとその方と食  
べた夏蜜柑を思い出されたのでしょうか。そういえ  
ば、近頃はあんな夏蜜柑はさっぱり見かけなくなっ  
たけれど、と懐かしく思うひと時です。(なほ子)

ひこばえや児を追ふ足のもどかしげ

長崎 桂子

「ひこばえ」と云う季語とお孫さんの姿。これも

作者の気持ちがよく伝わってくるのですね。季語の  
効果が發揮され、動きません。(なほ子)

卵五個抱きいるつばめ外は雨

秋川 泉

野鳥観察を趣味とされる作者なればこそ、卵の数  
までしっかりと詠みこまれています。さすが！「外は  
雨」でしっかりと卵を守って巣にこもるつばめと、湿っ  
て暖かい巢の匂いまで感じられ、この句を生き生き  
させています。(なほ子)

紫陽花や道掃く方に会釈して

石森 理和

紫陽花の美しさと道を掃き清めて下さる方に会釈  
して通ったと云う。植物の好きな作者の思いに溢れ  
た温かなやさしい気持ちになる句ですね。(泉)

切り分ける西瓜の赤の烈しかり

大日向幸江

ドキッとする句です。緑の西瓜をざっくり割ると

ピツタリですね。よちよち歩き位でもなんと達者に  
早いこと。こちらは必死に追いかけてもとても敵わ  
ない。微笑ましく幸せな情景です。(泉)

あんみつや路地行く神輿眺めつつ

森 なほ子

「三社祭」とした中の一句。作者は店内で美味し  
いあんみつを食べながら外の光景を眺めている。こ  
の静と動。三社祭(毎年五月に行われる正式名称は  
「浅草神社例大祭」)の神輿は時に喧嘩もあつたり  
して迫力満点です。(泉)

旅のカタログどつと届きぬ五月晴

赤座 典子

ツアーなどに参加すると、次から毎月のように  
どつさりカタログが来ます。私の場合、開くのも面  
倒で即資源ゴミ行きなのですが、この句の場合はは  
違います。季語五月晴を使っています。それで、旅  
ごころを誘われて弾んだ気持ちでカタログを開く、

中は真っ赤。西瓜を知っているから中が赤いのは当  
たり前なのですが、その日は、その赤を「烈し」と  
感じた作者。鮮烈な句です。「虹の元白波の立つ岬  
かな」もスケールの大きい句で好きでした。

(なほ子)



赤ちゃんが足りないといふソーダ水 佐藤喜孝

俯いて濡るる子鴉丸の内 篠田純子

傾いて水平線や大南風 定梶しよう

来し道を望む薄暮の登山小屋 須賀敏子

父の日やあたたかなりし父の膝 田中藤穂

十葉は物陰なれど真盛り 長崎桂子



巫女の鈴チリリと払ふ梅雨湿 森なほ子 +

道祖神の道案内や草清水 赤座典子

草むしりテレビの中は嘘ばかり 秋川 泉

梅雨に入る歩道に傾斜あるを知る 石森理和

出来たての虹を見せたく電話口 大日向幸江

風呂ラジオ壊れて急に梅雨の音 七郎衛門吉保



喜孝抄





佐藤喜孝

秋川 泉

もう少し種明かしをして欲しい気がする。

明易し礼状やつと書き上げる  
ステージの澄む歌声や夏の海  
酷暑の日挑みていざと障子貼る

一句目。時の経つのを忘れ、こころを込めて礼状をしたためた。気がつくと夜も明け初めてきた。明易である。素直な表現は悪いことではないが……。 「やつと」を省略するだけで「明易」が「やつと」を暗示し、説明語ではなく詩語に変はる。

二句目。野外ステージがうかんだ。夏の海を前に透き通る歌声を思った。一句目三句目事柄を伝へやうとしてゐる。そのやうな振りをした佳句もあるが。前後の二句とは違ひこの句はひろびろとした空間に歌声が広がってゆく。感動された歌声だと分かる。

三句目。「俳句は日記」と言ふ俳人もられるが、今

大日向幸江

牛に眼のとろりとしたる十三夜  
秋茄子の大豊作に泣き笑ひ  
秋風の通る廊下に職人の

一句目。名月から一月後、秋もより深まった後の月。十三夜は満月でないのも奥ゆかしい。こんな情緒を知ってはゐないはずの牛の目もとろりとしてゐる。ユニークな句だ。

二句目。一句目の独自の視点から一転世俗に溺れてしまった。

三句目。なんの職人なのだらうか、何をしてゐるのだらうか。句尾の「の」の続きがあるやうな句づくりだ。

日一日あったことを五七五に書き留めればいと云つてゐる訳ではない。そこには感動、驚き、発見があればなほよい。

長崎 桂子

七郎衛門吉保

蒲の穂の待合室に話の盛ん  
病葉の降る其に雀一羽かな  
嚙締める今朝の至福やさくらんぼ

夏萩に花蜜のある蜷蝶  
顔見えぬ挨拶交す蛭狩  
教科書のごと鳴く老鶯の清涼

一句目。待合室が話し声で満ちてゐるといふ句だが、「蒲の穂の待合室」がよくわからなかつた。固有名詞のやうにも読めるし。「の」でも切つて読めば情景が少し見えてくる。「蒲の穂や」であればなほ穂がはつきりみえてくる。確かに待合室に蒲の穂があれば、あれこれと話に弾みがつくといふものである。

二句目。夏落葉と違ひ病葉落葉はつひ手にしたくなる。

一羽の雀が興味を示したのだらうか。やさしい作者の目。

三句目。さくらんぼが嫌ひな人はさうはいないであらう、家の孫を除いては。アメリカのサクランボと違ひ色

も幸せ色である。こう手放しで至福をかみしめてをる句に、何も言ふことはない。「今朝」が少々句を締めてゐるか。

一句目。夏萩のやうな細かな花にも蜜があり、それを求めて小さな蝶が訪れる。そのことに吉保さんは感じてをられる。「はしたて集」を受け持つてから、辞書のお世話になってゐる。辞書では分からぬ新しいことはネットのお世話になる。

「花蜜」が目慣れなかつたので辞書をひいた。結果、やはり花は不要ではないか。使ふなら「花の蜜」。

二句目。このやうな時、どんな言葉のやりとりなのか興味が湧いた。もう一步踏み込んで欲しい句。

三句目。硬すぎる。鶯の鳴き方に先人も挑んでゐる。

参考までに

老鶯やホーホケキョーにケキヨ足せり 瀧 春一  
よき朝やほろほろほけきよの初音聴き 林 翔  
ホウのなくケキヨももたつく初音なり 伊藤白潮  
さらばとて老鶯のケキヨ国訛 堀内一郎  
いかれどもわらへどほづほづほおほけきよ 佐藤喜孝

石森 理和

異常気象必需品なりサングラス  
ガサゴソと裏で音する熱帯夜  
仏壇に鬼灯飾り僧を待つ

一句目。今年の夏は異常気象といはれ、とてつもない猛暑に見まはれた。その上に地震・大水・地崩れと踏んだり蹴ったりな日本の国土であった。作者はこの異常気象にはなぜかサングラスが必需品だと。わたしなら黄金の清涼飲料水。またエアコンだといふ声も聞こえる。今

年の暑さは「猛暑」では済まず、テレビでは「命にかかわる危険な暑さ」といつてゐた。「極暑」は昔から歳時記にあるが余り使はれないやうだ。  
二句目。「裏」の位置をもう少しはつきりさせたい。家の裏・壁の裏・テレビの裏・襖の裏……。  
三句目。盆支度を淡淡と述べた句。もう少し曲折が欲しい。

定楳じょう

庫裏に干し水着の赤がけしからぬ  
相撲部が四股ふんでゐる雲の峰  
ははその母の蚊遣火よくけぶる

一句目。じょうさんの俳句を毎月楽しませていただいてゐる。「けしからぬ」といつても心底思つてゐるわけではないだらう。庫裏に干す水着の赤を見て場所柄を弁えぬ若者だと一寸違和感をおぼえたくらひだらう。それをガンコぢぢいのセリフのやうに「けしからぬ」といふ。そこがおもしろい。いやもしかしてこれがじょうさんの

本音だったらもつとおもしろい。

二句目、季題を詠むのが俳句なのだといふ結社があるが、さうゆう結社でも季題を詠んだ句ばかりではないのはご承知の通り。この句の「雲の峰」は据りがよい。上五中七に添へる働き以上に、季語は季語として独立してゐる。上五中七と対等な力関係である。連句の付け合ひのやうな間合いに感心した。  
三句目。最後はしんみりとする句。母を敬愛するが上での「ははそのの」である。

田中 藤穂

夕涼や影濃くなりし八ヶ岳  
貝塚は埋戻されぬ夏の雲  
独裁の不安と不満パリー祭

一句目、破綻のない安定した風景句。

二句目。いまでも新築工事中に古い時代の生活の痕跡が見つかり、学術的に調べて、調べが済むと初めて工事

が続行されると聞いた。この句の貝塚もその様にして人の目に触れることになった貝塚であらう。貝塚にしたら、やつと陽の目をと残念なおもひをしてゐるかも知れない。「埋戻されぬ」は、乾いた表現のやうであるがさうではない。「夏の雲」が心地良く句に収まつてゐる。  
三句目。「パリー祭革命なるも知らぬ娘等」と、村田静枝さんが傳句会に出句された。掲句はそのことを勿論ご存知のこと。民主主義に疲れたり振り回されると「独裁」といふ甘い蜜を持った花が口を開いてゐる。心しなければと受けとめた。

須賀 敏子

ひっそりと戦場ヶ原に岩魚釣り  
梅雨明けの陽明門に遊びけり  
国宝の猫を潜れば夏木立

一句目。ひっそりとしてゐるのはは釣り人。細かいことだが、「戦場ヶ原に」の「に」の「に」にするか取ることも出来るかと考へたが結論が出なかった。

二句目。梅雨が明け金箔などで彩られて陽明門の煌びやかさがいや増してゐる。「遊びけり」はゆとりがあり嫌ひではない。

三句目。ここでは「国宝」は詩語になってゐない。別の表現を考えたらいかがか。夏木立は鮮明でよい。

### 赤座 典子

小劇場へ外階段の灯の涼し  
戦乱を喜劇に仕立て夏芝居  
忘れじと語り合ひたる夜半の夏

一句目。忘れてしまつてゐたことを思ひ出した。妻と二人でよく下北沢の劇場に通つたものだ。ところが劇場の名前も劇団の名前も失念してゐる。WEBで一寸調べたら「ザ・スズナリ」のやうな氣になった。膝を折りたたんで見たことだけ思ひ出す。劇の内容も腫である。この句、熱氣に包まれた劇もはねてからのこと。「灯の涼し」で劇の熱氣が伝はる。

二句目。その観劇した内容を述べられた句であらう。  
三句目。その帰路の情景。平和をあらためてかみしめ今日見た戦乱の世に戻らぬやうにと、おもひを新たにされた。

連作で一夜のやうすが知れておもしろかった。

### 篠田 純子

藻の花のつんつん日比谷濠満々  
八月や陰より颯と雀発つ

一句目。畳み込むリズムが心地よい。藻の花が水面を抜きんでて咲いてゐる様をつんつんと表現した。つんつん、まんまんと、オノマトペで調子がよい。満々は、水量なのか藻の状態なのかとふと立ち止まつたが、瑣末なこと気がついた。日ごろ通つてゐる作者だから分かる変化である。

二句目。八月の濃い影の中から雀が飛び出た。きつと周りの明るさに紛れて雀がそこにゐるとは知らず近づか

れたので驚かれたのであらう。雀も猛暑の日向より、日陰を好むのであらう。

### 森 なほ子

夏の雲フィヨルドの空狭すぎる  
この国の王族夏蝶のごとし  
衛兵の「ジユピター」奏つ夏の空

一句目。フィヨルドの深さをこのやうな表現で見事に再現された。おもしろい視点。わたしも仰いでみてゐる感覺を持った。残念だが季語の働きは十分ではない。

二句目。連作だから分かると云つてもやはり「この国」だけでは少々つれない。ノルウエーの王族が夏蝶とどう関はるのか興味があるところだが宿題。

三句目。ホルストの惑星の中の一曲。「木星」のメロディに日本語の歌詞をつけ歌はれ、クラシックのメロディが広く知られることとなった。ノルウエーでもポピュラーなのだらう。耳に親しんだ曲が異国の地の衛兵のラッパから聞こえてきた時は驚かれたことであらう。ホルスト

はイギリスの人。イギリスでは「ダイアナ妃の婚礼時や葬儀の際にこの曲が演奏されたことでも有名で、木星はイギリスでは誰もが知つてゐる国家的メロディーなのです。第二の国歌とも呼ばれるくらいです。」とある。ノルウエーの王族と何か関はりがあるのだらうか。

季語「夏の空」はあつさりすぎる。音がイメージできるやうな雲の固有名詞？のやうなものでもいかがかと。  
一息に書いた文章と違ひ、数日かけて書いてゐるので読み返すと書きやうに斑がある。流れが一様でないこと、また旧仮名遣ひが間違へてゐたりと、目を瞑つて頂く点が多々ある。

(順不同)



肺

ローカル線肺の奥まで青田風  
肺しかと抱けば白息まだらなる  
目瞑る新緑の香を肺に溜め  
川蜷や肺吸虫が居て候  
冷たさの肺に残れりみどりの夜  
肺囊をうらがへしたるごとく咳く

ハイウエー

初日影新車を包みハイウエー  
廃屋の並びし村に露の臺  
廃屋に一枚垂れし秋簾  
廃屋に出入りをする早雲  
廃屋に十五夜の月おしみなく  
廃屋をことなく通過雨台風

誹諧

誹諧や此の世の外へ出るあそび  
誹諧の出廻らしとなる冬籠  
俳諧にをとこの妬心金魚玉  
鶴泣かせ鶴を引かせて俳諧師  
俳諧の枝葉末節ぶだうの芽

排気

鳥居出ず夏至の太陽排気ガス

篠田 純子  
渡邊 友七  
後藤 志づ  
佐藤 恭子  
篠田 純子  
竹内 弘子

松本 米子

須賀 敏子

山荘 慶子

佐藤 喜孝

早崎 泰江

早崎 泰江

佐藤 喜孝

芝 尚子

竹内 弘子

佐藤 喜孝

竹内 弘子

松村美智子

藤野 寿子

石森 理和

佐藤 喜孝

石森 理和

長崎 桂子

竹内 弘子

石森 理和

早崎 泰江

鎌倉喜久恵

長崎 桂子

石森 理和

篠田 純子

赤座 典子

堀内 一郎

堀内 一郎

山荘 慶子

堀内 一郎

長崎 桂子

芝 尚子

排気ガス一身に浴び梅咲けり  
白砂青松故郷排気ガスに秋思

早崎 泰江  
長崎 桂子

廃棄物

秋の雨くづれかけてる廃棄物  
背景に空よし松よし桜よし  
夕茜背景とする濃紫陽花

鈴木多枝子  
東 亜 未  
赤座 典子

拝見

さはやかや能拝見の旅へいざ

芝 尚子

俳人

俳人の寡黙の歩み秋の雨  
いつよりの俳人ぎらひ薬降る  
春雲俳人の訃の相継げり

芝宮須磨子  
佐藤 喜孝  
田中 藤穂

沛然

沛然といふ大きさに冬硝子

佐藤 喜孝

配達

冬あけぼの牛乳配達威勢よく  
郵便配達行くさきざきの熟柿かな  
配達夫木下闇を褒めてゆく  
配達車雪解凍の絶え間無く

芝 尚子  
定梶じよう  
田中 藤穂  
赤座 典子

恋猫に夫はいはいと答へをり

這松

齊藤 裕子

葉裏

風立てば葉裏綾なす蓮池  
カクタスの葉裏に小さき冬の虫  
細波を葉裏に映す若楓  
蝉の殻葉裏にすがり夏を越す  
初秋や牛蒡の葉裏まっ白に  
雨宿りしつづ葉裏の尺取虫  
七月のえごの葉裏の白きこと

松本 米子  
竹内 弘子  
石森 理和  
鎌倉喜久恵  
竹内 弘子  
篠田 純子  
竹内 弘子

生える

歯が生える栗鼠の仕草に林檎食む  
地球儀に歯が生えをり打捨てむ  
秋祭少年に髭生えそめし  
子ら帰りおたまじゃくしに足生える  
夏めくやまた歯の生えぬ子のバイバイ  
十二月ビルの上には草が生え

石森 理和  
佐藤 喜孝  
田中 藤穂  
田中 藤穂  
大日向幸江  
佐藤 喜孝

映える

秋燈や鳥居に映えて稲荷山  
荃立の白さが映える露地の奥  
駐車場新車に映える柿若葉  
波郷碑の黒きに映えし黄水仙

河合 笑子  
山荘 慶子  
芝宮須磨子  
竹内 弘子

這ふ

花芒さながら白蛇尾根を這ふ  
縞柄の壁虎壁畫の佛這ふ  
蠅生れ明るい方のガラス這ふ  
湿度八十余梅雨を這ふ元氣者  
新蕎麦やガラス戸の外椿象這ふ  
胸鰭の赤子這ふやう黒出目金  
はればれと空仰がむと田螺這ふ  
気散じに歩けば泥田に田螺這ふ  
五月雨や塀這ふ草木青ふかし  
首振つて顔這ふ蟻を守宮拒否  
コンクリの中に海這ふ春紫苑  
雨上り足元を這ふ南風

藤野 寿子  
石森 理和  
佐藤 喜孝  
石森 理和  
長崎 桂子  
竹内 弘子  
石森 理和  
早崎 泰江  
鎌倉喜久恵  
長崎 桂子  
石森 理和  
篠田 純子  
赤座 典子  
堀内 一郎  
堀内 一郎  
山荘 慶子

ハウス

若ぎらの演劇論やサマーハウス  
オペラハウスへさようなら夏帽子  
オペラハウス七十二段春の風  
春の雪ビニールハウスつつがなし  
人住まぬテラスハウスのカンナの黄

石森 理和  
佐藤 喜孝  
石森 理和  
長崎 桂子  
竹内 弘子  
石森 理和  
早崎 泰江  
鎌倉喜久恵  
長崎 桂子  
石森 理和  
篠田 純子  
赤座 典子  
堀内 一郎  
堀内 一郎  
山荘 慶子

ハウス

若ぎらの演劇論やサマーハウス  
オペラハウスへさようなら夏帽子  
オペラハウス七十二段春の風  
春の雪ビニールハウスつつがなし  
人住まぬテラスハウスのカンナの黄

石森 理和  
佐藤 喜孝  
石森 理和  
長崎 桂子  
竹内 弘子  
石森 理和  
早崎 泰江  
鎌倉喜久恵  
長崎 桂子  
石森 理和  
篠田 純子  
赤座 典子  
堀内 一郎  
堀内 一郎  
山荘 慶子

ハウス

若ぎらの演劇論やサマーハウス  
オペラハウスへさようなら夏帽子  
オペラハウス七十二段春の風  
春の雪ビニールハウスつつがなし  
人住まぬテラスハウスのカンナの黄

石森 理和  
佐藤 喜孝  
石森 理和  
長崎 桂子  
竹内 弘子  
石森 理和  
早崎 泰江  
鎌倉喜久恵  
長崎 桂子  
石森 理和  
篠田 純子  
赤座 典子  
堀内 一郎  
堀内 一郎  
山荘 慶子

## あとがき

毎月二度の句会を楽しみに出かけます。句会にお出かけにならない人と通信句会はどうかとなど、新しく句会も愚考してまます。

「あをやぎ句会」は篠田純子さんのお世話で京橋が句会場です。わたしは江戸を舞台にした時代小説を夜はもっぱら読んでおますので、通りの名の立札に「木挽町通り」などとあると、小説の中に迷い込んだ気になります。銀座一丁目の昭和通りを一本はずれた通りの街路樹の根方に少し土があります。三月四月ごろになるとはこべらが瑞々しい翠を広げます。夏になるとなんと烏瓜がひよるひよると立ち上がってゐるではありませんか。八月、九月とだうなつたか楽しみにしてきたが全く伸びてゐなかつた。日が当たらないのか、もしかしたら切られるかして再度伸び始めたのだらうかなど心配した。

あるビルの下部にプレートに「免震ビルとかで

大地震の時は50センチほど動くので傍にものを置かぬやう」と記されてゐた。ビルを通り越すまで緊張してゐる。

奥付の発行日はあとがきを書いた日、なかなか遅れを取り戻せず、計画されてゐる原稿も目の目を見ない。ここまで来たなら開き直り焦らずに、一歩一歩進むかと反省かたがた開き直つてゐる。

(喜孝)

二〇一八年九月号

発行日	九月二十六日
発行所	東京都中野区中央2-50-3
電話	090-9828-4244
ファックス	03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／松村美智子・福井美佐子・ティリ エイマ  
表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普)(店番018)4586402  
佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)